

平成18年 5月20日

砺波医師会誌

杏和だより

第186号

◇◇◇ 目 次 ◇◇◇

〔時 評〕・終末期医療	高橋 卓朗	2
〔各職名役員名簿〕		4
〔活動報告〕		5
〔花 曆〕・秋夕立	桐沢しょう二	9
〔散居村〕・春が来た	伊東 方美	10
・水泳	家接 健一	11
・おあしすギャラリー	井上久美子	12
・アジアの近現代史	生垣 正	13
・スーパー婆に見習いたい	石黒 聖子	15
・雑感	石崎 良夫	16
〔新入会員紹介〕	伏木医院 伏木 弘	18
絶滅危惧種?	住田小児科医院 住田 亮	19
.....	河合医院 河合 晃充	20
〔編集後記〕	窪 秀之	21

発行所 砺波市幸町 6 番 4 号

砺波医師会

発行人 砺波医師会長 高橋 卓朗

終末期医療

砺波医師会会長
高橋卓朗

射水市民病院の人工呼吸器取り外し事例は、その後も波紋を拡げている。各地で病院単位での終末期医療を含めた対応策が検討されている。今春、大阪で開催された第33回日本集中治療医学会は「ICUにおける末期医療の在り方」案を提示し、議論を行い、末期医療とは「可能なすべての検査、治療と看護を行ったが、救命不可能で、間もなく死亡することが明らかな時期における医療」としている。また医療の中止については、「単独で判断している施設も存在するが、単独で判断すべきでない」「経験と知識を積んだ集中治療専門医が、患者の家族と担当医グループの意見を調整する」「家族間で意見が分かれたときは、治療の中止、手控えをすべきでない」「家族間の調整は倫理委員会、医療ソーシャルワーカーが行う」等の意見が出された。これらは概ね妥当と思われるが、インフォームドコンセントの基本は医師と患者の上下でなく、横の繋がりとして捉えることにある。それには互いに強い意志と忍耐力が必要であろう。

養老孟司は「カミとヒトの解剖学」のなかで『日本人が「死ぬこと」を考えなくなって、相当な年数になる。死ぬこととは、じつは生き方にほかならない。ただの延命が不要だということは、おおかたの一致である。－中略－その判断は、本人のものである。それが「普遍的」な答えであろう。いまの世の中でも、「立派な」死に方はあるはずである。しかし、そんなものに、「一般的な基準」などない。自分の生死くらい、自分で考えられるうちに、考えるべきであろう。医者にまかせる、という答えも立派な答えである。それは「医の倫理」を高めるはずである。不信はなにも生まない。－中略－一度しか起こらないできごと、それが個人の生である。－中略－医師が生死の判断を、危険だからといって避けるなら、だれがそれをするというのか。－中略－あらゆる判断には、危険が伴う。それが生ではないか。その判断を避ける世の中をつくれればつくるほど、個人の生は「安全」となり、不思議なことに、生は無意味になっていく。定まった道を歩むことになるからである。その種のやり方は、そろそろいい加減にしたらどうだろうか。「生きていない」医師に、「生死の判断」ができるはずがないのである。』と述べている。傾聴すべき意見である

う。

また故梶田昭は遺稿となった「医学の歴史」の最後に『「ヘルシンキ宣言」にいう「完全な説明と自由意志による同意」（インフォームドコンセント）が診療の上で必須の要素とされるようになった。しかし、インフォームするのが一方的に医師であり、コンセント（負ける、屈する、という古義がある）するのが患者と決めてかかれば、新しい錯覚、新しい権威が生じる可能性もなくはない。21世紀を迎え、私たちは、医学の真の進歩へ向かう人類の叡智に信頼したい。』と述べている。

私たちは、この2人の先輩の叱咤と激励に応えるべく、真剣に努力をしなければなるまい。

現在、「再生医療」の現場では「死の判定基準」は「脳死」である。もはや「心臓死」に戻ることはできない。この判定基準をどのような形で「全ゆる死」の基準とし、インフォームドコンセントするのか。私たち一人一人が「死」と向かい合い、そのなかから答えを見つけるしかないのであろう。



各職名役員名簿

(平成18年4月1日～20年3月31日)

(職名)	(氏名)	(担当業務)
砺波医師会長	高橋卓朗	総括
		地域産業保健センター所長 検査センター所長
同 副会長	吉岡勉	副総括
		地域保健・病診連携・学校保健 臨床検査センター 学術・生涯教育
同 理事	山本郁夫	副総括
		産業保健 広報・情報公開・情報システム 救急医療 介護保険
同 理事	倉知 圓	勤務医
	大橋 雅 廣	病診連携、社会保険
	山下 直 宏	学術・生涯教育
	柴田 崇 志	地域保健・健康教育
	杉下 尚 康	庶務、会計
	佐伯 俊 雄	乳幼児・学校保健
	金井 正 信	医療経済、がん検診
	藤井 正 則	産業保健、環境保健
	坂下 泰 雄	学校心臓検診
	松 智 彦	健康スポーツ医学、医療安全対策
	福井 靖 人	広報、障害者福祉医療
	窪 秀 之	救急医療
	川上 卓 久	医療情報システム
同 監事	広野 隆	
	森田 嘉 樹	
	柳 下 肇	

活動報告

(平成17年11月～平成18年4月まで)

平成17年11月

- 1日 砺波地域産業保健センター小委員会
- 7日 砺波市役員会
南砺市医会役員会
- 8日 小児急患センタースタッフ会議
- 10日 産業保健研修会 「粉塵並びに石綿による健康障害とその予防」
富山産業保健推進センター所長 加須屋 實
- 14日 定例理事会
- 15日 南砺市民病院医師研修会
「高齢者の入浴事故を予防するー入浴事故のメカニズムにせまる」
射水市民病院院長 麻野井 英次
- 16日 社会保険委員会（県医）
- 17日 急患センターについて
- 19日 南砺市民フォーラム〈むきあって「認知症」と共に生きる〉
「認知症の前ぶれとその予防～頭キトキト大作戦」
筑波大学臨床医学系精神医学教授 朝田 隆
「南砺市における認知症診療ネットワーク作り」
砺波地域リハビリテーション支援センター南砺市民病院センター長 南 真司
「認知症の方が安心して自宅生活を過ごしてもらうために」（シンポジウム）
患者さんの家族の立場から ご家族の方
訪問看護師の立場から
南砺市井波訪問看護ステーション 若松 京子
ケアマネージャーの立場から
福寿園居宅介護支援事業所 宮崎 紀子
かかりつけ医の立場から
金子医院 金子 利朗
- 21日 富山県医療推進協議会
県・郡市医師会協議会
第5回砺波胸部疾患検討会
- 22日 学術講演会「今望まれるホルモン補充療法の実際とラロキシフェンの位置づけ」
金沢大学大学院分子移植学（産婦人科）助教授 小池 浩司
- 30日 砺波地域産業保健センター運営協議会

平成17年12月

- 5日 砺波市役員会
南砺市医会役員会
- 12日 定例理事会
産業保健小委員会（県医）
- 19日 第6回砺波胸部疾患検討会
- 20日 小矢部市・砺波医師会合同学術講演会
「EBM時代における脳卒中外科治療の意義」
富山大学医学部脳神経外科教授 遠藤 俊郎
南砺市民病院医師研修会「小児の耳鼻咽喉科疾患」
南砺市民病院耳鼻咽喉科 小田 真琴
環境保健委員会（県医）
- 26日 介護保険委員会（県医）

平成18年1月

- 6日 南砺市医会臨時総会
- 10日 定例理事会
- 16日 救急医療委員会（県医）
第7回砺波胸部疾患検討会
南砺市医会役員会
- 18日 介護保険—主治医研修会
「介護保険の制度改正について」
県高齢福祉課介護保険班主幹 大石 久義
「新予防給付及び要介護認定について」
県高齢福祉課介護保険班主任 浅岡 幸信
「主治医意見書様式の変更」
県高齢福祉課介護保険班主任 浅岡 幸信
「主治医意見書記載上の留意点」
砺波地方介護保険組合認定審査会会長 山本 郁夫
- 20日 南砺市医会勉強会
「これからの地域医療と南砺市の医療連携」
富山大学医学部総合診療部教授 山城 清二
- 23日 平成18年度基本健康診査について市との打ち合わせ（砺波市）

- 24日 学術講演会「H.pylori除菌後に何が起こるか？」
富山大学医学部第三内科教授 杉山 敏郎
- 28日 平成18年度砺波准看護学院入学試験

平成18年2月

- 1日 砺波准看護学院運営理事会
- 2日 医療情報システム委員会（県医）
- 6日 砺波市役員会
南砺市医会役員会
- 13日 平成17年度臨時総会（役員選挙）
定例理事会
- 20日 第8回砺波胸部疾患検討会
- 21日 平成18年度基本健康診査等について市との打ち合わせ会（砺波市）
南砺市市民病院医師研修会 「Brain Attackに対する治療戦略」
富山大学医学部神経内科助教授 高島 修太郎
- 22日 小児急患センター専門部会
- 27日 砺波地域産業保健センター小委員会
学術・生涯教育委員会（県医）
- 28日 学術講演会 「血管病診療における最近の話題」
金沢医科大学循環器内科教授 梶波 康二
臨時代議員会

平成18年3月

- 2日 砺波准看護学院卒業式
- 3日 結核予防医師研修会
産業保健委員会（県医）
- 6日 砺波市役員会
南砺市医会役員会
介護保険委員会（県医）
- 7日 勤務医委員会（県医）
- 9日 県・郡市医師会協議会
- 13日 定例理事会
- 14日 地域保健・健康教育委員会（県医）

南砺市民病院医師研修会 「回復期病棟とは何か」

南砺市民病院リハビリテーション科部長 八尾 直志

16日 広報委員会（県医）

17日 砺波地域産業保健センター運営協議会

20日 第9回砺波胸部疾患検討会

23日 臨時代議員会

24日 診療報酬改正説明会

砺波医療圏小児急患センター運営審議会

26日 平成18年度定例総会

学術講演会

「市立砺波総合病院泌尿器科における新しい取り組み

～腹腔鏡、代用膀胱手術、前立腺癌センチネルリンパ節生検～」

市立砺波総合病院泌尿器科部長 江川 雅之

平成18年4月

3日 砺波市役員会

南砺市医会理事会

6日 砺波准看護学院入学式

産業保健研修会 「メンタルヘルス対策の進め方」

富山産業保健推進センター相談員 角田 雅彦

「改正労働安全法の解説および個人情報保護法に基づく健康情報の保護」

富山産業保健推進センター相談員 吉田 壽光

7日 県・郡市医師会長協議会

17日 第10回砺波胸部疾患検討会

医師連盟執行委員会

18日 南砺市民病院医師研修会

「南砺市における糖尿病医療連携の可能性について」

南砺市民病院内科部長 手丸 理恵

20日 定例代議員会

広報委員会

25日 学術講演会 「高脂血症の診断と治療」

金沢大学大学院医学系研究科 生活習慣病講座教授 小林 淳二

秋 夕 立

秋夕立母の遺せし庭のもの
 台風へ念押しに行く木戸の円
 忘却の木戸開けゆきし野分かな
 一言へ妻の二言夜長の灯
 脳細胞減る減ると聴く虫時雨

オルガン

報恩講新発意さまはタクト振る
 オルガンも弾き講寺の主婦として
 筆やかやお七夜女人堂埋め
 老師頻尿お七夜法話途切れたる
 雪霰お満座荒れといふ模様

雪 女

吹雪く窓細胞診に命診る
 まざまざと異型細胞雪しまく
 命告ぐ寒紅引きし身だしなみ
 雪に学び雪によるこび雪に泣き
 雪女美しかりし里に老い

春 寒 し

春寒し一切舎切妻の留守
 春寒し家事まごまごときりもなし
 春寒し鳩の時計に聞く孤独
 春寒し大脳皮質を鼓舞しては
 春寒し耶穌を信ぜし居士信女



ボールペン

夜の長き回せば色の変わるペン
 稲架空いてまったく閑な婦人科医
 台風に眼のでき日本小ささよ
 老の愚痴聴くも診療法師蝉
 稲架襖かこみ新市となりにつけり

散る紅葉

冬日ざし待合室に昭和古り
 散る紅葉優性指定医返上す
 緊急避妊羞恥はいづこ電たたく
 問診寒しあっけらかんと少女の性
 冬夕焼け性病む少女ルージュ濃く

椎 間 板

雪掻いて八十四才誕生日
 椎間板労はられつつ雪を掻く
 二月尽大きくなりし妻の声
 億劫といふ齡あり猫の恋
 冬帽子老院長と呼ばれもし



春が来た

伊東医院

伊 東 方 美

17年豪雪と名のついた冬がやっと終わった。はじめて屋根雪をおろしてもらった。今年は本当にもう雪の降るところにいるのはいやになった。真剣に生まれ故郷の静岡に帰りた
いと思った。でもわたしももう50、今さらどこで働かせてくれるものか、とようやく思い
とどまった。

56豪雪を経験したのは卒業の年だった。年末の卒業試験が終わった翌日の12月28日から
2日間雪が降り続いた。北陸に来て初めて正月を下宿で過ごした。

年明け1月20日だったか、翌日は一外の卒業試験だったが、町内一斉の除雪にはじめて
参加した。一階の自室の外に置いた洗濯機は雪で埋まって一部変形し、2日間ほど入り口
が雪で開かず窓から出入りした。3月末に主人の城端の実家に嫁入り道具を運び入れた時
は軒まで雪がまだあったということだった。

昭和58年長女を産んでからは毎年城端で雪の中の正月だった。2年続けて年末にタクシー
に乗って城端へ帰った記憶がある。それが次女を産んだ昭和62年からあまり雪が降らず、
静岡から手伝いに来てくれた両親にあまり雪で恐ろしい思いをさせずに18年過ぎた。その
次女が高校に入学してから集中して雪が降るようになり度々城端線がとまるようになった。
と思ったら今年の豪雪だった。

気候の変化が極端になっている。やっぱり地球がおこってるんだな。とこのごろ思う。
保険の点数はかわるは、介護保険の認定方法はかわるは、麻しんの予防接種はかわるは、
めまぐるしいことこの上ないが、やっと春がきたから心機一転またがんばろう。



水 泳

市立砺波総合病院 外科

家 接 健 一

ある日、同級生が劇的に痩せたという、うわさを聞いた。およそ20kgも体重を落とすことに成功したそうである。その後、温泉での同級会で直接会ったが、確かに、顔や身体は、以前のぼっちゃりした感じはなく、でっばった腹はすっかり腹筋が見えるまでしまり、まるで別人になっていた。夜、酒を飲みながら、いかにして痩せたかを聞かせてもらった。過労で倒れた彼は、水泳を始めた。仕事を夕方5時30分に終わらせ、その足でプールへ通うという生活を繰り返した結果、体重はみるみる減り、おまけに県の水泳強化選手になってしまったらしい。とにかく水泳が楽しくて、気が付いたら痩せていたというのである。

単純な私も、さっそくプール通いを始めた。とは言っても、平泳ぎはできたが、水泳はどちらかと言うと苦手であった。クロールなどは息継ぎができなかった。上手な人の泳ぎを見ると、楽そうに、パタンパタンとゆっくりといつまでも泳いでいる。とても気持ち良さそうである。一方私はというと、最初はおぼれそうなバツタのようにもがき、なんとか25mの半分進み、残りは歩くという情けない状況であった。帰りに本屋に寄って、水泳に関する本を立ち読みし、次回の対策を練っては、挑戦を続けた。2ヵ月ぐらいしてからであろうか、プールに入って、最初の一蹴りが、この上なく気持ちいいと感じるようになった。ほんの2、3秒のことであるが、仕事を忘れて、水中に顔を沈め、重力の方向とは垂直に身体を倒し、水の中をスーと進むこの一瞬がなんとも言えない快感である。“あー幸せ”といった感じでしょうか。それから2年の月日が経ち、クロールも力を抜いて数百メートルは泳げるようになった。背泳ぎ、バタフライも25mくらいは泳げるようになった。しかし、下を向くと、相変わらず出っ張ったお腹が見える。私は、痩せない体質であると納得して、今日もプールに通っている。



おあしすギャラリー

市立砺波総合病院 皮膚科

井上 久美子

砺波総合病院におあしすギャラリーというギャラリーがあるのを御存じですか。外来棟2階の眼科と歯科口腔外科の間の廊下にあります。

ここには砺波市に関係のある美術家の方々の絵画、書、写真、彫刻などがかざられています。いつも2名の方の作品が左右の廊下に飾られ、2カ月に1回くらい出品物がかわります。外来や入院の患者様のために飾られたものです。職員の私も大変楽しんで見せていただいています。短い廊下ですのでせいぜい絵画で5枚位が並ぶといったところです。わざわざ展覧会に出かけて行って見るほどの熱心さのない私ですが、毎日、外采、病棟の行き帰りに眺めさせていただいています。絵画や写真のほうが私には取っ付きやすく、彫刻はむずかしいけれど、長くながめていても見飽きがしないという感じがします。写真は展覧会にいった眺めたことは一度もないのですが、ここに飾られたものは大変にすばらしいと思いました。砺波の自然の風景写真が多いのですが、水田に夕日が映る中での田植えの風景の写真などに感激しました。

今は高沢氏という書道家の書、中村氏という彫刻家の彫刻がかざられています。書の字は勿論すばらしいのですが、内容が金子みすずという詩人の詩です。詩の中味もおもしろく、楽しんで眺めさせていただいています。

無料ですばらしい作品を次々にみせていただいて大変有り難いと思っています。



アジアの近現代史

市立砺波総合病院 健診センター

生 垣 正

1986年、中国黒龍江省立医院との交流で中国へ行ってきました。そのとき、定番コースである西安の華清池へ行きました。ガイドの先生が背景にそびえる小高い山の中腹を指差して、あそこに見える小屋が、有名な西安事件の舞台となった山荘です、今年はちょうど50周年にあたります。と説明してくれました。事件について当然私たち一行が知っているとはばかり思っていたようです。何も知らないので恥ずかしい思いをしました。50周年でもあり、日本へ帰ってから時々テレビでもこの事件についての報道があり、日本軍に爆殺された張作霖の息子の張学良が、日本軍と戦うより共産党の弾圧に力を注ぐ蒋介石を捕らえ、毛沢東に引渡し、第2次国共合作へと進んだことを知りました。蒋介石は張学良を台湾へ渡ってからも台北市内で幽閉し、張学良は蒋介石がなくなってやっと自由の身になったようです。

2002年9月末の3日間、ソウルへいってきました。9月30日はマッカーサーが仁川に上陸し、ソウルを解放し、朝鮮戦争は一挙に大逆転しました。ガイドは尊敬の念をこめて説明してくれました。光化門では若い兵士たちが一糸乱れずコンクリート地面にリズムカルに銃床をたたきつけて音を立て、非常にきびきびした記念のエキジビションをしており、通りかかった女子中学生たちでしょうか、見惚れて夢中で拍手しておりました。翌日、北が見える展望台へ行きました。軍事境界線の延々と続く鉄条網に沿って広い広い国道を1時間近く走ります。鉄条網の反対側は見渡す限り高層アパート群で、まるで未来都市のような景観でした。北が攻めてきたときにはそれを倒して戦車を阻止するのだそうです。手前の町で軍の検問を受けます。一般市民はここに車を置き、バスで展望台へ行くそうです。展望台はイムジン川をはさみ、ただ北の農村が見えるだけで、遊園地もなくお店もありません。しかし、週末になるとソウル市民がどっと押し寄せるそうです。北へのどのような思いがあるのでしょうか？翌日帰路の途中、ある大学で学生がハンドマイクで何か呼びかけていました。ガイドによると、韓国の女子中学生2名が米軍の戦車に轢き殺されたが、裁判もなしにアメリカへ帰り、それに対する抗議のデモを呼びかけているのだということでした。その少し前に沖縄でも米軍に日本の女子高生が殺され、それに対し沖縄住民の激しい抗議で米軍が謝罪し、犯人を引き渡すということがありました。そのことで、ガイドは、米軍は日本には謝罪したが、韓国人には謝罪すらしないと嘆いておりました。ソウル

を解放したマッカーサー、人口の4分の1がひしめく中に広大な軍事基地を占め、韓国人への殺害に謝罪すらしない米軍、鉄条網を隔てて対峙する縁者、肉親のいる北朝鮮、韓国人の複雑な心をほんの少し垣間見た気がします。

2006年3月、3日間台北へ行ってきました。欧陽非非のような肝っ玉姉さんガイドが案内してくれました。市内の2.28記念館は旧NHKだったそうです。1945年8月15日台湾も日本から解放され喜びに包まれたが、数年後失望と怒りに変わったようです。蒋介石とともに本土から来た人たち（外省人）はみすぼらしく野蛮で、台湾人（本省人）を抑圧したようです。1947年2月27日闇市場で老婦を検挙し、あろうことかお金を全部取り上げるということに、日ごろから不満を持っていた回りの人たちが、あまりのむごさに抗議したところ、憲兵隊が発砲し、1人が死亡、これをきっかけに暴動に発展し、そこが旧NHKだったので、建物を占拠し、台湾全土に事件を報道し一挙に大きな抗議行動となったようです。それに対する弾圧はすさまじく、第2次大戦の全戦死者よりもずっと多い死者を出し、戒厳令が敷かれ、蒋介石が死ぬまで続いたようです（ガイドの話によると、特に医師や弁護士などインテリ層が夜中に連行され、人知れず処刑されたということです）。事件も押し隠され、やっと10年前から少しずつ調査されてきている、という説明でした。ガイドさんも、もし外省人と結婚しようとしても一族の人たちが絶対許さないののでできないでしょうと笑って語ってくれました。

私は能天気にもぶらりと数日、中国、韓国、台湾へ行ったのですが、そこで歴史のクレパスの一端を覗くことになりました。考えてみれば、小さいときから今まで、外国といえは欧米にしか関心が向いていませんでした。激しく揺れ動いたアジアの近現代史から完全に目をそむけていたのです。恥ずかしいことです。

最近の韓国・中国の映画、ドラマの質の高さと面白さに驚いています。若々しく、ダイナミックであり、叙情的です。

韓国では軍事政権に対する激しい民主化運動の荒波に鍛えられた若い世代の監督たちがどっと出てきたようです。

中国では文化大革命で下放されていた若い全国からの年の違う天才たちが大学へどっと戻って一緒に入学、卒業し、互いに刺激しあう状況が生まれたようです。

こうしたことが、かつてないアジアの文化状況を作り出しているのではないかと私には思えるのです。

もっとアジアに目を向けよう、と考えています。

スーパー婆に見習いたい

石黒医院

石黒聖子

まずは謝罪。係りの諸先生には原稿が遅れたこと、深く陳謝。ピンク色のマーカーに縁取られたお叱りの通達を親娘ともども頂いたときは、南砺医師会除名の危機かと思ったぐらいに焦るも、同時に勧告された当院長は「年寄りには、書くことがない。」と嘯いて、平然としたものである。年寄りだからこそ、書くことがあろうに。

さて、老朽化したボロ医院2階を改築して、陽当たり良好内科を開業して1年半。ふと、考えるに、私はもしかしたら、年寄りが好きかもしれないということだ。だから、妻に先立たれたやもめの年寄りの後添いに…という意味ではない。私の2倍ぐらい生きてきた先輩、人生経験も豊富で、話が実に面白いのである。民主党の癒し系、渡辺恒三氏にちょっとしたブームが巻き起こったごとく、年寄りの言葉には、耳を傾けるべきなのだ。

当院2階、陽当たり内科に足繁く通院する89歳の老女がいる。私は密かにスーパー婆と命名している。朝4時半起床。5時から2時間、雨天以外はゲートボール。朝食後畑で草むしり。少々の休憩後、漬物を漬け、山菜を干し、昼食後再び畑に勤しむ、百姓の性なのだそうである。余裕があれば就寝前の楽しみである司馬遼太郎の上中下巻を図書館で借り、夕方は曜日ごとにパッチワーク・書道・俳句の会で活躍し、発表会時には出展。移動はすべてバイクである。

先日「先生、私にゆうよーくへ行っていていいか。」と聞くので「あっ、入浴？いいよ。」これに対して「何言ってるんだい、ニューヨークだよ。」決して受け狙いの作り話ではない。ひこ孫がニューヨークの韓国系企業に勤めているというのだ。そこに遊びに行くという。たいしたものである。10日後、帰国して当院を訪れての第一声が「グランドキャニオンに行きそびれたので、今度にするわ。」今度とは…何時か!? とにかく好奇心が人一倍旺盛なのだ。誠にもって頼もしいスーパー婆である。当院の年寄りにも聞かせたい、「書くことがない」とは何事だ!?

この婆にひとつ悩みがあると打ち明けられた。「先生、私、死ななかつたらどうしよう。」



雑 感

南砺市民病院 放射線科

石 崎 良 夫

最近、車庫の私の車に妻がバック運転で衝突し、前側のナンバーが変形し、バンパーが傷つきました。怒るに怒れず笑って直すことにしましたが、改めて自分の車遍歴を思い出させることになりました。僅か4台ですが、振り返って見るといずれも個性的かなと考え深いです。

最初に20年近く乗ったのがドイツのフォルクスワーゲン・ビートル（淡い黄色）です。形がユニークなことと故障が少ないという事で購入し、東京と富山を何度も往復しました。夏はわずか50馬力のエンジンにも関わらず後付けしたクーラーにスピードは上がらず、冬は空冷のため室内温度が上がらず寒い思いをした記憶があります。それでも取替え部品が沢山出ており、ハンドルやシフトなどの車内装備から、フェンダーやショックアブソーバ、キャブレターやマフラーを順次代えていった思い出があります。また、空冷であったため素人でもエンジンに手がかけられ、自分でエンジンをはずして排気量のアップもやりました。部品を一つ代える度に楽しくワクワクして乗っていましたが、車検や騒音の問題があり、泣く泣く次の車に代えました。今の若者には自分で代えるという楽しみは味わえないことだと思います。

次に選んだのは人生の重みも増してきたとの自己判断で、ビートルとは正反対のいわゆるフォーマルな車にしました。ドイツやイギリス、スウェーデンなどのゲルマン系とは一味異なるラテン系のプジョーの505・V6（オートマチック、紺色）です。クラウンあるいはマークIIでしょうか、フランスでは最上級の車でした。石畳を走るためのしなやかな足回りと柔らかめのシートから心地よい乗り心地が楽しめました。日本では非合法な高速走行になるほど安定感が増し、直進性もすばらしかったです。長距離ドライブでも身体に負担はなく、札幌や宮崎から1日で帰った記憶があります。ただ、困ったことに冬の雪道ではスタッドレスタイヤでも苦労しました。後輪駆動車でトランクに砂袋を積みましたが、それでも病院の駐車場からの僅かな坂も出られないことがあり、次の車の選定に大きな影響を与えました。

そんな影響もあって雪道でも安心して走れる車、大雪であってもいつでも病院へ出勤できる車と言うことで大型の4輪駆動車を探しました。ヨーロッパ車はとて高く、日本車は街中を走るには何か威圧感が強く迷っていたころに、アメリカ車でジープグランドチェ

ロキー（赤銅色）の新型が出たので飛びつきました。ジープの流れから40度近い坂も登るのだそうですが、大きさも手ごろで高級感もあり、カタログを見ただけで決めていました。ゴロゴロと回るだけの大きなエンジン（5.2L）とグラリと傾く柔らかな足回り、遊びのある甘いハンドルなど広大な大地を走る昔ながらのアメリカ車とはこういうものだとな納得して乗っていました。オートマチックでありながら燃費も思ったほど悪くないのですが、左ハンドルゆえの悩みもありました。高速道路で料金を払おうとすると手が届かないのです。まだETCなるものがなく、魚の網にカードを入れて差し出すといつも料金所でニヤッとされたことが思い出されます。

そのうちに、ゲルマン系およびラテン系のヨーロッパ車、アメリカ車とその風土に合った車に乗ってきたからには世界に売れている日本車にも乗ってみたいと思うようになりました。60歳も近づきあと車を楽しめるのもそう長くはないと考えて、いままで乗ったことのないカテゴリーの車、スポーツカー、それもオープンカーを物色しました。コベンからソアラまで日本には大から小までそろっていましたが、他の車との共有部品がほとんどなく独自に開発され、F1にも参戦しているホンダの車と言うことでS2000（6段マニュアル、銀黒色）を購入しました。普段走るには9000回転など必要のないほどの2Lの高性能エンジンを積んでいますが、自動開閉する布製の屋根をオープンにすると快適なドライブが楽しめます。氷見海岸や庄川沿いのドライブを楽しんでいます。トランクにゴルフバッグが1個かろうじて乗りますので、ゴルフ場への僅かの距離でもオープンにして気持ちを高揚させています。

振り返ってみて、超高級車ではないが世界のそれぞれの風土で育てられた個性のある車たちで、なかなか良い自動車ライフをおくってきたなと自己満足し、外装が直ってくるのが待ちどおしいです。



新入会員紹介

伏木医院

伏 木 弘

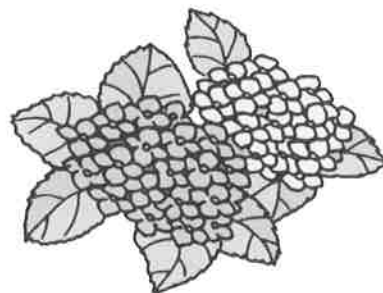
会員の皆様にはますますご清栄のこととお喜び申し上げます。昨年8月に、市立砺波総合病院を辞し、父に代わり当地において、「伏木医院（産婦人科・内科）」として開院する運びとなりました。今まで公私にわたり、数々のご指導ご厚情を賜り、厚くお礼申し上げます。

現在は、開業後約8か月を経過しましたが、まだなれない毎日です。特に内科の患者様には勉強させていただくことが多く、非常に興味深く時間をかけて診療しております。今までは内科疾患は合併症として対応しておりましたが、現在は主な疾病となりやはり意気込みも違います。したがって、初心に帰っての診療であり、意外と新たな疾患を発見することがあります。また、重大な疾患が考えられれば砺波総合病院との連携システムを利用させていただき、画像検査や診療によるアドバイスを受けることができ、非常に感謝しております。

産婦人科に関しましては、開業時からはじめました、砺波総合病院と提携させていただいたオープンシステムの方法で、順調に稼動しており、私にとりましては総合病院にいたときと同じように外来だけを当医院で行っている感覚です。病院のスタッフの皆様は非常に優秀であり安心してお願いすることが出来ます。本当に多くの方々に支えられながらの日々であります。

これからも、地元の方々をはじめ、多くの方々にご協力いただき、微力ながら、貢献できるよう努力いたします。

今後とも変わらぬご指導、ご鞭撻を賜りますようよろしくお願いいたします。



絶滅危惧種？

住田小児科医院

住 田 亮

1999年より金沢大学より砺波総合病院に赴任し、小児科医（部分的に救急医）として6年余り勤務致しました。昨年10月に病院を辞し、となみ町で小児科医院を開設したことに伴って、改めて砺波医師会の末席に座らせて頂くこととなりました。医師会の先生方には今後もより一層のご指導・ご高配を賜りますようお願い申し上げます。

さて、表題の絶滅危惧種、なにもトキやイヌワシのことではありません。どうやら私も小児科医もこれらの動物同様に絶滅の危機に瀕しているようです。小児科医不足はすでに皆様ご承知の通りですがこの医療圏も例外ではありません。昨年南砺中央病院の小児科は常勤医がいなくなりました。北陸中央病院も常勤医が身体を壊してこの4月から小児科閉鎖です。南砺市民病院と砺波総合病院は現体制を何とか維持できそうですが、これとていつまで続くのか疑問です。日本各地で似たような現象が起きており、憂慮した日本小児科学会では新たな診療体制の構築を模索しています。現在、富山県も含めて各県ごとにたたき台を作って検討作業を行っています。砺波医療圏を例にとりますと砺波総合に重点的に（4～5人？）医師を配置し、入院治療も担う地域センターとします。その上で患者さんの利便性等を考慮し、必要な病院に砺波から医師を交代で派遣するという案が現時点での結論です。（あくまで「案」です。すぐに実行に移される訳ではありません。）異論・反論は当然出てくるでしょうが、現状の少ない人的資源を有効に利用するためには避けて通れないことだと思います。無論、将来小児科医志望者が増えてくれば状況は変わってくるのですが、残念ながら当面は厳しい状況が続きそうです（ちなみに今年の北陸4大学合わせての小児科入局者数は2～3人で、うち金大は1名です）。もしこのようなシステムが導入されましたらこれまで以上に先生方のご理解とご協力が必要となりますのでどうかよろしくお願い致します。

河合医院

河 合 晃 充

この度、平成17年9月末にて5年半の間勤務いたしました市立砺波総合病院を辞し、10月からは父とともに「和康会 耳鼻咽喉科 河合医院」にて診療をさせていただくこととなりました。私はここ砺波で育ち、高校入学より岡山県にて勉強させていただき、平成元年に川崎医科大学を卒業し、その後10年間は同耳鼻咽喉科に入局。平成11年4月より金沢大学耳鼻咽喉科に入局し、平成12年4月より市立砺波総合病院にお世話になっておりました。いままでも一応、砺波医師会の会員ではありましたが、病院勤務医から開業医と立場を変えて今後とも地域の皆様の健康に寄与できればと思っております。

耳鼻咽喉科は耳の中、鼻の中、のどの奥と身近なようで、実際には目にしにくい部位を専門としており、自分の耳の中を見たことがある人は少ないものと思われま（鼻の中や口腔内は鏡を使って見ることができますので見たことある方は多いと思いますが）。そこで当院ではより状況を納得していただくために、診察用顕微鏡やCCDカメラ、喉頭ファイバーなどを使って実際の所見をできるだけ目で見て確認していただけるよう診療を工夫して行っております。今後もより納得していただけるような工夫は進めていきたいと思っております。

これといって趣味があるわけではないのですが、地元出身でそれも出町の町中ということもあり、夜高祭や子供歌舞伎など地域の伝統行事にもいろいろ参加させていただき、この方面でも地域の皆様に少しでも貢献できたらと思っております。

医師会の皆様方にも今後とも引き続きご指導、ご鞭撻のほどよろしく願いいたします。



砺波医師会誌 第186号

編集後記

いよいよ平成18年度がスタートしました。年度が替り各先生方におかれましてもご多忙であろうと拝察いたしますが、桐沢先生を始め会員の皆様より貴重な原稿をいただき、お蔭さまで無事杏和だより第186号を発行することができました。ご協力ありがとうございました。

とにかく今年度以降は診療報酬・薬価改正、介護保険法改正、安全衛生法改正等々、本当に「正」しく「改」まっているのかという意地の悪い見方はさておき、医療に関係すると思われる多くの制度が変わります。また国は疾病予防や介護予防に重点を置くとして新たな構想を次々と打ち出し、将来的には医療・介護全体を完全にコントロールしようという意図が見え隠れしています。日本医師会の執行部も刷新されたことですし、改革が皆にとって良い方向へ進むよう期待をこめて応援していきたいと思えます。

さて、昨年より杏和だよりは発行日や装丁を刷新して再スタートし、早一年経過しました。新たに写真、絵や図も掲載可能になりましたので、今後ともふるってご投稿をお願いいたします。杏和だよりのこの小さな改革が、会員各位の風通しを少しでも良くして皆様のお役にたてれば、われわれ（特に原稿集めに四苦八苦しておられるであろう福井靖人広報委員長）にとって望外の喜びです。

窪 秀之 記

〔広報委員〕 八尾 直志、高桑 健、家接 健一、柴田 崇志、野村 忠、
藤井 正則、富田喜久雄、松 智彦、窪 秀之、柳下 肇、
福井 靖人

